

梁啓超の維新思想に見える福沢諭吉の「文明論」

劉 恩 慈

A Comparative Study of Liang Qichao's Enlightenment Thought and
Fukuzawa Yukichi's Theory of Civilization:
Fukuzawa's Influence in Liang's Literature

Yan Chee LAU

1. はじめに

本稿は近代中国の知識人である梁啓超の初期の著作を福沢諭吉の著作と比較し、梁啓超は福沢から何を学び取ったのかを明らかにしたい。梁啓超は日本で亡命生活を送っている間に、福沢をはじめ、多くの日本の知識人から影響を受けたと言われる（Chang 1971, Schwarcz 1986p p.29-34）。しかし、梁が実際に何を日本から学び、中国の知識人社会に伝えたのかは明らかにされていない。本稿は梁啓超の著作の一部を福沢の著作と照合し、近似する部分を見つけ出す作業を行うことによって、梁啓超における福沢の影響を考察することを課題とする。

十八世紀以来、ヨーロッパ大陸には工業生産が急速に発展し、海外市場を開拓するため、西欧諸国はみずからの勢力範囲を東に拡大しつつあった。それぞれ海軍を伴い、アジア各地に植民地を建設していた。その植民地主義の拡張に対抗するため、アジアの国々は相ついで近代化政策に乗り出した。中国はアヘン戦争（1840-42）でイギリスに敗けた原因を鑑み、1862年に日本より一足先に「洋務運動」を実行した。これは主に軍事産業を中心とする近代化運動であった。この運動の推進者は李鴻章（注1）などの「洋務派」官僚であった。一方、日本に於ては、1853年に米使のペリーが浦賀へ日本の開国を求めて来航して以来、幕府はその「鎖国」政策を漸次緩和しつつあった。しかし、国家レベルにおける本格的な近代化運動の開始は、1868年の明治維新を待たねばならなかった。明治維新は軍事のみでなく、より抜本的な政治改革であった。つまり、日本は封建的な徳川幕藩体制を否定し、近代的な国家制度を取り入れて中央集権的な明治国家を建設したのである。果たしてその後、1860年代に始まった中日両国の近代化運動は、いかに進んでいったのか。

およそ三十年後、朝鮮問題が導火線となり、1894-5年に中日両国の間に日清戦争が勃発した。その戦争の結果は中国の最も近代的な「北洋艦隊」が日本に撃滅される事になった。この敗戦の意義は単なる中国側の軍事的な敗北に止まらず、両国の近代化政策の成果という側面から見れば、中国の「洋務運動」は日本より六年も早く始まったものの、最終的に失敗に終り、日本では明治維新を出発点とする近代化が成功した事を意味する。しかも、長い歴史の間に中国の文化を学び、加えて国土も小さい日本に中国が敗戦したという事実は、中国の人民に沈痛な打撃を与えた。中国の志士は漸く近代化の真義を考えるようになり、軍事産業を中心とする従来

の「洋務運動」ではとうてい中国を諸列強による分割の危機から救いだす事が出来ないと自覚した。こうした状況の下に、清政府内部にも開明的な政治改革を求める声が出てきた。

「洋務運動」の失敗で、政府のなかに「進歩派」という新しい勢力が結集した。この中心人物が康有為であった。康は日清戦争の勝利国である日本の維新運動に着目し、日本をモデルとして、中国に政治改革を推進しようとした。彼らの提唱したのは立憲君主政治・国会開設などであった。康は光緒皇帝（注2）の支持を得て、1898年に「變法」運動（注3）を遂行した。この運動に、康有為に最も協力して「變法」の推進に重要な役割を果たした人は梁啓超（注4）である。梁は若い頃、康有為に学び、「變法」運動を推し広め、清末に中国の近代化運動に大きな貢献を遂げた啓蒙思想家である。後に「戊戌政變」が勃発し、梁は日本に亡命する事になるのである。

中国や日本などの近代化運動は内部の自らの発展というよりも、むしろ、外部からの圧迫により激発された物であった。各国の近代化の政策がそれぞれ自国の状況に応じて異なるが、諸列強から国の独立自主を守る事は各国の共通した狙いである。この共通点から出発し、中国や日本などの一部の知識人は近代化の過程に於て互いに協調し、力を合わせて欧米諸国の脅威に抵抗する事を考えたのであった。従って、彼らにとって中国か日本の近代化の問題を取り上げる時、一国だけでなく、アジア極東の全体から見る必要が求められたのである。それ故、国と国との交流活動が近代化運動の全貌の解明に非常に重要となってくる。梁啓超はまさに当時の中国と日本との交流活動の使命を担った一人であると考えられる。特に、梁は滞日中、福沢の思想の影響を受け、福沢の思想を消化し、自らの「新民説」の論を展開していった。かつ、新聞や雑誌を通じて「新民説」を中国大陸に伝え、大きな反響を得た。そして、福沢の思想は間接的に梁より中国に伝えられていったと考えられよう。梁啓超の思想は三つの時期に分けることが出来る。第一期は誕生から1898年の「戊戌政變」までで、彼の維新思想の準備期である。第二期は日本への亡命から「辛亥革命」後の帰国までの13年間で、彼の思想の成熟期である。その間に梁は福沢の文明思想の影響を受けて、『新民説』を著した。第三期は帰国から病死までで、彼は主に中国文学と歴史の研究に努めていた。本論は梁の維新活動に最も活躍する第一期と第二期の思想を取り上げ、その中に、第一期から第二期に変わる梁の思想的な転換というところで福沢との思想的な連関を明らかにしようとする。

2. 「戊戌變法」における維新思想：「開民智」

梁啓超は若い頃、他の中国の青年と同様に「科擧」（注5）の階梯を登り、ひたすらに「四書五經」の勉強に励んでいた。1890年の春、彼は北京で「會試」（注6）を受験してから、上海で『瀛環志略』（注7）と他の西洋の漢訳書を購入し、初めて西洋の学問に接触したのである。同年の8月頃、彼は初めて康有為と出会った。康は当時、中国を救う道が政治改革と洋学に志す所にあると語った。つまり、それは「變法」である。康の話は梁に大きな啓示を与えた。翌年、梁啓超は「萬木草堂」に入門し、康の維新思想を学ぶ事になった。それ故、梁啓超の初期の思想は殆ど康有為の思想を継承していたと言える。梁啓超が本格的に政治改革運動に参加するのは、康有為らの第二回の上奏文を光緒皇帝に呈上する1895年5月2日からである。当時、ちょ

うど日清戦争が終わった直後で、日清両国の代表は日本の下関で講和会議を開き、条約に調印する時であった。中国は敗戦国で、その条約に従い日本に賠償金を支払い、澎湖列島と台湾を植民地として日本に押さえられる事になった。かつて中国の文化を学び、中国人に「東夷」と言われた日本と不平等条約を締結する事は中国の政府と人民にとって沈痛な打撃で、「国の恥」と認識された。梁啓超はそれに刺激され、「公車上書」(注8)を第一歩として政治改革を中心とする維新運動に取り組む事を決意した。梁は康の紹介で北京「強學會」の秘書となった。「強學會」は中国の維新運動の中心組織で西洋の書物が多く集まっていた。洋書の流布が極めて少ない当時には、梁にとって洋学を学ぶ絶好の機会であった。翌年、梁は「強學會」の解散のきっかけで、黄遵憲(注9)と共に上海で『時務報』(注10)という新聞社を創立した。梁は1896年、「論報館有益於國事」(注11)に、新聞が国内では政府と人民の間を連絡し、国外では外国の情報の収集などに不可欠な役を演じると述べた。新聞は維新運動の重要な道具である(注12)。梁は後に海外へ亡命しても、新聞社の設立に非常に力を入れることになったわけである。

梁啓超は『時務報』から海外、特に日本の情報を入手していた。中国と地理的、社会的、文化的に最も近い日本の実情を知ることが重要であった。上海駐在日本総領事の推薦で古城貞吉という日本人が『時務報』の日本の通信員として招聘された。古城は1896年7月から1898年5月まで日本の新聞や雑誌(注13)に掲載された社会、経済、政治、学術などに関する記事や論説合計111篇を漢訳し、『時務報』に載せた。梁はそれにより日本の「変法」、即ち明治維新の実情を知ることが出来た。それは彼の明治維新をモデルとした新たな「變法」の形成に重大な役割を果たした。

『時務報』に連載していた「變法通議」(注14)は、梁啓超の初期維新思想が最も明白に見られる著作である。その中に梁の考えた「變法」の必要性和その本質と具体策が書かれていた。梁啓超は始めに「變法」を次のように解釈した。「法とは天下の公器であり、變とは天下の公理である」(注15)。梁の言っている「法」は政治法制を指し、天下を治める器具である。なお、梁は古今の歴代の先王は時勢の変化に応じ、新しい制度を作った。「故に、法を作る事が出来なければ、聖人ではない。時に従う事が出来なければ、聖人ではない」(注16)述べている。言い換えれば、「變」とは天下の公理で自然法則である。その「變」に従えば、「保國、保種、保教ができる」(注17)という事である。梁は「嘗て日本幕府が政を専らにし、諸藩に征伐される事になった。又、露・獨・米に侵犯され、亡國になるところであった。日本は明治維新以後、新しい政治を施し、三十年もかからず、我が琉球を奪い、我が臺灣を割譲させた」(注18)という事例を挙げ、「變法」の効果を明白に示した。しかも、梁は軍事産業を中心とする「洋務運動」の失敗を取り上げて、「變」という公理に違反する弊害を証明した。

梁啓超は「變法」の本質が如何なる物であるかについて、次のように述べていた。『「變法」の本は人材の育成にある。人材の興は學校の設立にある。學校の創立は「科擧」の變革にある。而も、以上の全部の成功は官制の變革にある』(注19)。つまり、最終的には「變法」の鍵が官制改革にあるという事になる。其の理由は後に論じる事にする。梁は「世界の運行は『亂世』から『大平』に進み、勝負の本は武力から智力に變わる」(注20)というように社会の進化を考えたが、同時に中国の識字率が日本より大変低い現状を強く認識していた(注21)。「それ故今

日、自強を圖れば、『開民智』を第一歩としなければならない」(注22)と梁は考えていたわけである。民の智を開くという「開民智」の具体策は、学校教育において、当然、近代的な学校制度を創立する事にある。当時、中国は教育の予算が最も少なかった。これに対し、軍備には膨大な金額を費やしていた。梁はそれについて、事物の軽重大小を区別しないと政府を批判した。梁は中国の高い不識字率という認識の下に国民に近代的な教育を行うには、先ず小学校を全国に設立すべきであると考えた。梁にとって、高等教育より、むしろ、日常生活に基礎となる初等教育を全国民に普及することこそ急務である。それで、小学校の教師を養成する師範学校の設立が不可欠になる。子供の教授法について、従来、子供に「大學之道在明明徳」のような難解な經典を暗記させる方法を取っていた事に対し、梁は厳しく批判した。彼は子供の思考力と自発性をより尊重する教授法を使用しなければならないと考えた。さらに梁啓超は男女平等という新しい観念の下で、女子の無学が美德であるという従来の一般的な考えを否定し、国家の興亡が女子教育と係わっていると女子教育の重要性を強調していた(注23)。

さらに、社会教育的側面では、前述の新聞社の設立の他に、「學會」の創立が極めて重要であると認識していた。「學會」とは同志が互いに學問を討論し、自ら學術研究を進めていく機関として理解されていたのである。西洋諸国では「學會」が非常に盛んで、国を發展させるには、「學會」が重要な役割を果たしていると梁は言及している。洋学を国民に紹介するためには、書物の翻訳が非常に大事である。梁はそれに最も力を入れていた。1897年に梁は自ら上海で「大同譯書局」を創り、翌年彼は光緒皇帝に訳書局の仕事に当たることを任命された。当時、中国では欧文に通達する人が少なく、翻訳が難行していた。梁は欧文を学ぶのに時間が掛かり、中国語に近い日本語を学ぶのが最も速い。しかも、日本人は既に良い洋書を日本語に訳している。直接に原書を漢訳するより、先ず和訳された洋書を着手した方がより効果的であると梁は考えている(注24)。かつて「洋務運動」の際に、教育が全く無視されたわけではなく、例えば、「水師學堂」・「自強學堂」等の西洋技術を教える学校がある。しかし、この学校から出た者は「科擧」制度の枠外に扱われるので、正式に国家官吏になることが不可能に近い。この人達の専門知識が社会的に認められず、結局、人材浪費になってしまう。当時の「科擧」は經典の暗唱を中心にする「八股文」を試験の内容として採用していた。受験生は多くの難関を乗り越えなければならなかった。受験生の思考力と批判力は重視されていなかったのである。新しい学校制度から出る人を人材として国が用いるためには、「科擧」を改革しなければならなかった(注25)。つまり、前述の「變法」の鍵が官制改革にある所以である。

以上、梁啓超の「變法通議」の主要な内容で、ここに彼の初期の思想が見られるであろう。全体的に言えば、梁の初期の思想において、注意すべき点は次ぎの通りである。
第一、教育の振興を中心とする事。梁は中国人の高い不識字率を強く認識した。国を救うには先ず教育から始まらねばならない。「民が智になれば、國が強くなる」。また、「變法通議」に教育の改革を最も詳しく論じ、「科擧」を批判しながら、「開民智」という方針を遂行する。しかし、彼が教育の重要性を過大に評価している事に関しては問題であろう。「權力は智により生まれてくるのである。一分の智がある人は一分の權がある。六・七分の智がある人は六・七分の權がある」(注26)という論を唱え、權力の有無が智の有無によるものであるとする。

第二、日本の明治維新をモデルにする事。梁は常に日本と中国を比較しながら、「變法」の論を立てていた。「變法通議」に述べられた教育等の改革には、大体日本の制度を参照したのである。但し、当時の梁啓超には単なる明治維新の表面的な改革や成果だけしか見ていなかった。つまり、維新の内面的な性格を未だ把握していなかったのである。例えば、「讀日本書目志書後」という論文に、「日本は西洋に學ぶのが非常に速い。明治維新から今日まで僅か30年の歳月で維新の功が成された。我々は日本の變法を學べば、我々の維新は3年で成功するであろう。日本の變法は20年で成功が収まった。我が國民と土地が日本の10倍なので、10年も掛からず、我々の變法は成功するであろう」(注27)。梁はただ両国の外形を比較したにすぎず、明治維新に対する認識はまだ不充分であった。

第三、以上の二点をまとめると、梁啓超の着手しようとした改革は学校制度や「科擧」＝官僚選抜制度や訳書局等の所謂「社会のインフラストラクチャー」に過ぎない。それは福沢諭吉の言葉によれば、「有形の文明」である。國民の主体性・自発性という精神的な側面については、まだ当時の梁の思想には見られない。

3. 日本亡命における思想的な転換：「新民説」

1898年9月に「戊戌政變」が勃発し、西太后や保守派官僚は政權を奪還し、進歩派を多く逮捕した。康有為は香港に脱出し、梁啓超は日本へ亡命した(注28)。梁は10月に東京に到着した。そして、梁はさっそく日本語を勉強しはじめ、日本の書物を多く読み、広く日本の知識人(注29)と交際していた。故に、梁啓超は身をもって当時の日本の近代化運動を体験した。これは彼の維新思想に大きな影響を与えている。

3.1. 梁啓超と福沢諭吉との関連

梁啓超は1902年、過去の数年の事を次ぎのように回顧した。「1898年10月、來日後、少し日本語が讀めるようになった。それ故、思想が一變した」(注30)。「又、日本に來てから、廣く日本の書物を讀み、様々な新しい事物を發見した。それ故、私は思想と言論に於て前と比べればまるで別人のようになった」(注31)。それでは、梁啓超の思想には、一体、如何なる変化が起こったのか。さらに、何によりその変化が起こったのかという問題に答えるため、次にそれを探ってきたい。

來日の翌年、1899年、梁啓超は「國民十大元氣論」(注32)を發表し次のように述べていた。「人間は之を以て生きていく事ができる。之が無ければ、死ぬ事になる。國の場合にも同じである。之は『元氣』というものである」(注33)。「元氣」というのは文明の精神である。「文明」とは『形質』と『精神』に二つに分けられる。『形質之文明』を求めるのは易い。『精神之文明』を求めるのは難しい。『精神』が具われば『形質』は自然に生じる。『精神』が存しなければ、『形質』は生じてこない。・・・『精神』とは即ち國民の『元氣』である」(注34)。さらに、文明を具体的に説明すれば、「衣服、飲食、器械乃至政治、法律等は所謂『形質之文明』である。但し、『形質之文明』に『虚』と『實』の違いがある。政治、法律の如く、之を求めるのはやや難しい。それ故、衣服、飲食の文明は、『形質之形質』といい、政治、法律の文明は、『形質

之精神』と云う。・・・國は民を以て立つ。民は『元氣』を以て立つ」(注35)。ここに梁啓超は国を立てる根本が文明の精神で、即ち「元氣」であると明白に論じた。梁は「變法通議」を著作する時、学校の設立や「科擧」の改正など所謂「形質之文明」に最も力を入れていた事に対し、来日後は、「精神之文明」という側面こそ、維新運動の根源であるという所に気が付いた。ここに、梁の維新思想における大きな転換が見られる。これが上の引用に述べられた「思想一變」という事ではなかろうか。而も、1896年の「變法通議」から1899年の「國民十大元氣論」まで僅か3年の内に、それほどの大きな思想的な変化が起ったのは梁の思想の内的展開というよりも、外部の刺激に由るものにほかならないと考えられよう。それについて調べてみると、上の梁の文は福沢諭吉の『文明論之概略』の一節(注36)から引用したことが分かった。その一節の要旨は梁の文と全く同じで、文体までも極めて良く似ている。梁は『文明論之概略』を部分的に直訳し、そのままに自分の著作に入れていると言っても過言ではない。福沢の『文明論之概略』は1875年に出版され、大好評で発行部数も多かった。それ故、23年後、来日した梁啓超は福沢の著作を読み、彼の思想を学び、それを自らの思想内部に取り入れたと考えても許されるであろう。では、梁は何故福沢に注目したのか、又は如何に福沢を見ているのかという問題から見ていきたい。

福沢諭吉は日本の近代化運動に大きな貢献を遂げ、近代日本最大の啓蒙思想家として広く知られている。彼は常に民間に活躍し、慶応義塾を創立し、教育事業に最も力を入れていたから、「国民の教師」と称されていた。福沢は幕末に幕府の使節団に加わり米国と欧州の七か国を訪れ前後三回に海外に渡った事がある。1866年に彼は海外での体験や見聞を『西洋事情』に書き、欧米諸国の物事を日本人に紹介した。しかし『西洋事情』は海外事物の紹介に過ぎなかった。福沢は初めて彼の独特な思想を本に著し、日本の人民に大きな衝撃を与えたのは、先ず、1872年から著し始めた『学問のすゝめ』である。特に、「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」という著名な文で始まる初編は、大好評が得られた(注37)。初編に、福沢は幕藩時代の上下貴賤の身分社会に強く反発し、人間平等という観念を唱え、現実には人の社会地位が決して生れ付きではなく、人の才徳により決められるものであることを説いた。また、人の才徳が人の学問に志すか否かによるものである事も教えていた。福沢のいう学問は従来の伝統的な儒学ではなく、「人間普通日用に近き実学」(注38)であった。国家は人民の勉学によって自由独立を実現する事が出来るという福沢の思想は、当時の社会に於て斬新なもので、それからの近代化運動に大きな影響を与えている。

福沢諭吉のことは日本国内に広く知られているが、隣の中国の知識人にも知られている。梁啓超は1899年に出された『飲冰室自由書』の「文明普及之法」に梁は福沢を文明の推進者として取り上げた。この文章は梁啓超の「戊戌變法」の時に書かれた物で、つまり、梁は来日の前に日本の友人から福沢諭吉について、多少おしえられていたことが考えられる(注39)。演説が文明を普及する方法の一つである。梁は福沢が提唱した演説の気風を中国の「變法」を推し広める手段の一つとして取り入れようとする意図を持っていた事が明瞭に見られる(注40)。「政變」が勃発するまで湖南の「南學會」(注41)を始めとして、中国各地に「學會」が数多く成立し、「變法」運動に重要な役割を果たしていた。福沢によって創られた演説会が、梁啓超らの

「變法」運動に係わっていたことはたいへん興味深い。

梁啓超は1898年の末、日本に亡命した。ちょうどこの年に『福澤諭吉全集』（全五巻）が出版され、梁にとって福澤諭吉の思想をより良く理解する機会が得られたといえよう。およそ三年後、梁は横浜で『新民叢報』（注42）という雑誌をつくった。その創刊号に掲載された「論學術勢力左右世界」の中に梁は「智慧」と「學術」は人類社会に最も大きな影響力を持っているものである、「自らは新説を出さず、而も良く他國の文明思想を自國に移植し、その同胞に大きな幸福をもたらした者」（注43）というような啓蒙思想家の中に、梁はフランスのヴォルテールロシアのトルストイ及び日本の福澤諭吉の三人を取り上げて、今日の中国に最も期待しているのは以上の三人のような人であると結論した（注44）。これを見れば、梁が福澤を非常に高く評価している裏側に、自ら福澤のような人物になる意図があったのではなかろうかと考えられる。更に、梁は福澤について次のように紹介した。

「福澤諭吉は明治維新以前、教師の指導が無く、獨學で英語を習得し手で華英辭典を寫した事がある。また、獨力で學校を創立し、慶應義塾と名づく。新聞社を創り、時事新報と名づく。・・・数十種の本を翻譯し、専ら西洋の文明思想を輸入している。日本人の洋學は實に福澤から始まったのである。日本の維新改革事業の中で、福澤に諮問したのが、10の内に6・7にもあった」（注45）。梁は福澤の事蹟にも関心を持っている。更に、梁は1902年の「論教育当定宗旨」という論文に、「福澤諭吉は貧乏の庶民であるのに、終始官爵をもらわなかった。然るに彼は日本の教育の指導者である。・・・我が中國には、今日に至っても福澤諭吉のような人は未だ一人も居ない」（注46）。梁啓超は福澤の独立の精神を高く称賛する上、互いに改革者同志の間柄なので、福澤を自らの先輩として尊敬していたのではなかろうか。

3. 2. 福澤諭吉の文明思想の受容

梁啓超の福澤諭吉に対する態度が明らかになったから、次に梁が福澤から如何なる思想を学んだかという問題を取り上げる必要がある。この問題に答えるため、先ず福澤の文明思想を簡単に紹介しておく必要がある。さきほど、福澤の『学問のすゝめ』の初編について簡略に紹介したが、福澤は『学問のすゝめ』の続編を書きながら、1875年に『文明論之概略』を出版した。これは福澤の文明思想において最も重要な体系的な著作である。福澤は『福翁自伝』の中に、「東洋の儒教主義と西洋の文明主義と比較して見るに、東洋になきものは、有形に於て数理学と、無形に於て独立心と、この二点である」（注47）と述べた。彼はこの日本に無い「数理学」と「独立心」を求めながら、彼の文明の思想を展開していった。福澤の「数理学」というのは単なる数字の計算ではなく、むしろ、一步一步の論理的な分析という広い意味として理解されている。『文明論之概略』で、福澤は主に「文明の精神」という概念を論じている。文明というのは「外形」と「精神」の二つの側面がある。「外形」を取るのが易しく「精神」を取るのが難しい。「精神」が具われば、

「外形」が自然に生まれる。「精神」が備わらなければ、「外形」が生まれてこない。それ故、福澤は先ず文明を「精神」の問題として取り上げた。「文明論とは人の精神發達の議論なり」（注48）と雖も、決して個人的なことではなく、言わば「衆心發達論」である。より具体的に言

えば、文明は衆人の智徳の進歩である。「文明の精神」は特定の理論や体系を具えた思想や信条ではなく、むしろ、「古習の惑溺」や「古風束縛」という固陋の気風から解放され、人の「智」による独立自由な精神の働きを意味している。これは即ち、先ほどの「独立心」に当たる。また、文明を発展するため、人の精神はなるべく貪欲・多忙で、価値が多元的でなければならない。「蓋し人慾こそ文明開化の元素にして、其慾多ければ心の働きも亦多く、其慾大なれば志も亦大なる可ければなり」(注49)といい、福沢は儒教に抑えられている人間の欲望を肯定し、それを拡大せよと主張した。これは当時にとっては、斬新的な考えであるといえよう。さらに、福沢は全ての事物に「疑」を抱き、物を観察する時、先ずそれを分解しその根源を究明し、それから、それを総合的に観てその定則を推測せよという。例えば、歴史的な考察や統計的な処理などがそれである。これが福沢諭吉の独特な「数理学」的な思考方法であろう。以上の独立の精神と「数理学」的な思考方法は、当時の日本を文明開化にするには欠かせないものであった。

文明を求めるのは本来、人類社会の最高の目標であると福沢は考えていた(注50)。しかし、明治政府が成立したが、日本はまだ外国との不平等条約に縛られ、国家の利益が外国に侵害されつつある所であった。外国と交渉し、不平等条約から解放され、国際社会に完全な独立自主の国として登場するのは当時、日本の最大の政治的課題であった。福沢は先ず、これを日本の課題としてとらえた。国家の独立自主を図るには、「智」多き国民の支持が無ければならない。その「智」多き国民を求めるには、今日、固陋の気風を持つ人民を文明に導かなければならない。「今の日本人を文明に進めるは此国の独立を保たんが為のみ。故に、国の独立は目的なり、国民の文明は此目的に達するの術なり」(注51)と福沢は述べていた。福沢にとって、文明はもともと人間社会の目的であるが、ここ来ると、文明は単なる国の独立を実現する手段になってしまう。前後たがいに矛盾しているように見えるが、緊迫な国際情勢の下に、福沢は事物の緩急先後を考慮し、当時の日本に限り、「先づ事の初步として自国の独立を謀り、其他は之を第二步に遺して、他日為す所あらんとするの趣意なり」と考えた。何故なら、「先づ日本の国と日本の人民とを存してこそ、然る後に文明の事をも語るべけれ。国なく人なければ之を我日本の文明と云ふ可らず」(注52)と、福沢は当時、英国に占領されていたインドや病弱の中国などの事例を認識するが故に、国家の独立を保つ事が急務であると判断した訳である。また、文明とは普遍的な価値を持ち、人類最高の目的である。日本独立の手段としての文明は、日本がその最高目的を追求する資格を作るための物であると考えれば、福沢にとって、これは必ずしも矛盾とはいえなかった(注53)。

以上、国家の独立自尊を目的とする福沢の文明思想は、同じく中国の独立自主を図ろうとする梁啓超にとって、非常に魅力的に映った。とりわけ、梁は福沢の膨大な著作の中で、「独立自尊」に関するところに最も注目していた。1902年に創刊し、梁が編集長を担当していた『新民叢報』に、「慶應義塾講師、演繹福澤先生獨立自尊之義、十四條」と題する記事が掲載された。和田博徳の研究によれば、これは福沢の慶應義塾の門下生達が作った「独立自尊の意義」という文章の漢訳である事が明らかになった(注54)。福沢の執筆ではないが、彼の思想を伝える物であった。この記事に描かれた独立自尊の人になるためには、人は個人の修養のほかに、

他人を敬愛し、人を助け、信義を重んじ、紀律を守り、自治自制の能力を持たねばならないのである。且つ、根気が良く、人生の文明福利を達し、「一身一家一國」に義務と責任を尽くさなければならないのである。当時の中国は不平等条約で香港・九龍がイギリスに、旅順・大連がロシアに、琉球・台湾が日本に、というように中国の沿岸が外国列強に植民地として押えられ、中国の主権が「名存實亡」という現状になっていた。中国の独立自主を回復することは梁の何よりも最大の願望であり、福沢の独立自主という言葉がまるで「对症下药」のように病弱の中国を治療する靈薬のように思われた。それ故、梁は福沢の思想体系から独立自主の項目を選びだし、「独立自主の意義」という文章を特に取り上げ『新民叢報』に載せ、中国の同胞に紹介したのであった。その動機は全て中国の独立を図るためであったといえよう。

梁啓超は福沢に学んだ「独立自主」という国家の目標を達成するため中国を文明国に進めなければならないと考えた。その目標の手段である文明を進めるには、中国人はまず文明の精神を具え、「物理学」的な思考方法を身に付けることが肝要である。梁は福沢の論理に従い、先ず、1899年に『飲冰室自由書』を著作した。「飲冰室」というのは梁の筆名であり、彼は前年、来日してから、日本人と付き合い、日本の本を読みそこから感じた事を此の著作に書いていた。それ故、これを以て梁の来日直後の思想を理解することが出来る。本の前半に「文野三界之別」・「英雄與時勢」・「近因遠因之説」と題する文が掲載された。「文野三界之別」に梁は世界人類社会を野蛮・半開・文明という順序階梯に分類した。野蛮の社会では、人は定住せず、組織されず、文字があるとしても学問がなく、常に自然に左右される。半開の社会では、農業が盛んで国の外観が成されているが、内実が未だ不完備である。且つ、実学に務める者が少なく、創造力に乏しい。文明の社会は規則制度が整っていて人が自治自制で古風に束縛されず常に学問に志し幸福をもたらすのである。国の治乱が常に文明の程度に反映され、国の文明はまた国民によるものである。中国は正に半開の社会に相当する。「英雄與時勢」に、梁はこの半開の中国を文明に進めるため、ビスマルクのような英雄を待つより、むしろ国民を文明に進めるのがより切実であり、即ち「時勢」を造る事が必要であるとしていた。問題を解決するには、先にその原因を調べる。原因にはまた「近因」と「遠因」がある。「遠因」は事物の条理があるところで、これを先ず直さなければ、問題を解くことができない。今日の中国の病を治療するため、兵隊を鍛えたり、「變法」を行なったり、民権を興したりするのは、単なる病の近因を治すに過ぎない。これを以て到底中国を救う事が出来ないと、梁は「近因遠因之説」を論じていた。筆者の研究によれば、以上の三つの文章の主な文節は何れも福沢諭吉の『文明論之概略』の「一国人民の智徳を論ず」と題するところから、部分的に中国語に直訳し、そのまま自らの物として著作に入れた事が明らかである（注55）。ここに注目すべき事は、単なる梁の無断の直訳引用という事実を知る事ではなく、むしろ梁が福沢の提唱する物理学的な思考方法を自らの思想体系に受け入れようとしている事こそ重要だという事である。これは梁の文明思想の形成に於て大変意味深い所である。実際に『飲冰室自由書』に、以上の文章の他に福沢の『文明論之概略』からの引用が沢山あるのに、福沢の名前は一切注記されていなかった（注56）。梁啓超は病弱の中国を問題とする時、先ず中国を当時の国際社会の中に位置づけた。つまり、議論の本位を定め、文明国とされる諸列強と比較しながら、中国の病の根源を究明していく事を試み

ていたといえる。而も、梁は当時、行なわれた改革運動を見る時、これらの運動自体の価値を見るより、むしろこれらの中国における働きに着眼していた。例えば、「洋務運動」の近代的な軍備はその威力が鋭いに係わらず、中国の政局に於てその働きが必ずしも有益ではない。「要するに、これらは近因を治す法であり、遠因を治す法ではない」(注57)。このように議論の本位を定め、具体的な状況における働きにより物の価値を決めるという所は、正に福沢より得た物理学的な思惟方法ではなかろうか。

3.3. 「新民説」への展開

梁啓超が上述の「英雄與時勢」に表明したいのは、世界を動かし文明を進める原動力は、一・二人の英雄ではなく、むしろ一般人民の智力の働きである。人民の幸福が、「聖賢」の政府に頼る事によって得られるというような人民の依頼性を強く批判すると同時に、人民が国家に対して主導的な役割を果たす必要を主張していた。そうするためには、人民を文明に進め、文明の精神を身に付け、人民が抱く惑溺の気風を一掃しなければならない。梁は当時の中国の人民が長く惑溺の風俗習慣に浸っているので、中国を富強・独立の国にするために、先ず封建的な中国人を近代的な民族に変革せねばならぬと考えていた。これは民を新しくする、即ち「新民説」である。梁の『新民説』という論文は1902年から翌年まで『新民叢報』に連載されていた。これは梁が来日後、文明思想における展開のまとめでもある。「新民」というのは旧を全部放棄し他人（西洋人）に従う意味ではない。むしろ固有の物を見直し、本来無かった物を外から取り入れる事こそ意味しているのである。そして、梁は中国人に最も必要とする物を取り上げ、「新民」の方向や具体的な内容を論じていった(注58)。梁にとって、中国人に最も欠けているのは「公德」の概念である。実際に『新民説』の前身が1899年の「國民十大元氣論」と1900年の「十種徳性相反相成義」という論文であり、『新民説』は殆どこの二つの論文の中心の思想から展開されたものである。

梁は「國民十大元氣論」に、福沢の「文明の精神」の概念を取り入れ自らの「國民の元氣論」を展開していった。「元氣」というのは文明の精神であり、福沢の言葉によれば、「気風」又は「時勢」である。翌年梁は「十種徳性相反相成義」という論文を書き、次ぎの五組の徳性を取り上げた。「合群」と「獨立」、「制裁」と「自由」、「虚心」と「自信」、「愛他」と「利己」、「成立」と「破壊」がそれである。梁は福沢の文明思想を基にし、中国人の民族性を良く観察してから、中国人の気風を高尚にするために最も必要な徳性を、以上の五組にまとめたのである。ここに注意してもらいたいのは、最後の一組を除き、他の四組の後者が個人的なもので、前者が社会的な規範である事である。言い換えれば、後者が「私徳」で、前者が「公德」である。「私徳」とは個人の心に属する物で、「公德」とは個々人が団体の公共觀念に発する徳性であり、団体はこの徳性により成り立つとされているのである(注59)。梁はこの五組が互いに矛盾するように見えるが、実際には両方が補充し合い、並立し得るものであると考えていた(注60)。両方は互いに調和しなければ、各々極端に走り、結局、国が存し得なくなるとしたのである。

以上の五組を、次に具体的に説明しておきたい。「合群」と「獨立」に於て、梁啓超は当時

の中国人が独立の徳を持たない事を指摘した。學術に於て古に依頼し、政治に於て人民が政府に依頼し、清政府が外国に依頼し、皆自らの責任を放棄してしまった。中国を独立国にするには、先ず國民を独立の人間にしなければならない。これは恰も福沢の「一身独立して一国独立する事」である。言わば、「国と国とは同等なれども国中の人民に独立の氣力なきときは一国独立の權義を伸ぶる事能わず」(注61)という事である。しかし、個々人の独立のみならば、まるで砂のように固まらない。それでは独立の力に成れない。特に、当時の「民族帝國主義」(注62)の拡張に抵抗するため、中国人を総動員にしなければならない。それ故、個人を結合する「合群」の徳が無ければならない。それは必要の時に個体を犠牲にし、団体の利益を守る事である。それは梁の「合群之獨立」の意味であるという。

「制裁」と「自由」において、梁は自由が精神的な生命であると考えた。眞の自由は他人からもらうのではなく、他人の自由を侵害しない限り、自ら獲得するものである。個々人の自由を保護するため、制裁が必要になる。制裁とは法律である。それ故、自由を愛する國民は必ず公理に従い、自ら作った法律に従い、多数の決議に服従する。故に、法律制度が整然としている国の國民は、最も眞の自由を享受する事が出来る。つまり、眞の自由とは「制裁之自由」だと梁はいうのである。

「虚心」と「自信」に於て、自信とは大事業を成す本である。自信はただ空言ではなく、着実に目標を遂げる事である。傲慢や輕薄になってはいけない。何故なら、これは「虚心之自信」という物であるという。次に、「愛他」と「利己」に於て、梁は利己が悪徳ではなく、公理である。利己の思想を持つ事こそ自らの權利を守り、互いに競争しながら、社会を動かしていく。但し、人間は団体生活を送り、集團の利益を良くすることにより、即ち「愛他」により、自らの利益を確保することが出来るとする。

最後に「成立」と「破壊」において、梁は福沢の「掃除破壊・建置經營」という標語に従い、「成立之破壊」の論を展開していった。中国を病弱の患者として、長い歴史の間に積もった汚れや病気を薬で治療しなければならないと考えていた。「破壊」というのは中国の病を治す薬なのである。「破壊」は表面的に見れば良い事ではないように見えるが、これはまるで薬の働きのような事で、薬を無病の人に服ませると、身体に害があるけれども、病人に服ませると、病を治し体力を回復させる効目があるのと同じである。要するに、梁は物の価値を考える時、その物自体の価値よりも、むしろ特定の状況の下におけるその物の働きの価値に重点を置いていたと考えていた。つまり、世間に恒久不変の物は存在しない。梁は天下万物の価値は時勢の変遷に従い変わっていくから、今日の世に適合しない物を必ず破壊し、新しく適切な物を作らなければならないとしたのである。此処に、また梁が福沢の物理学的な思维方法の影響を受けている事が、見られるのではなかろうか。梁の「破壊」というのは決して無原則な破壊事業ではなく、常に今日の時勢に合う物を建設するという目的を持つ物である。これは「成立之破壊」という事である。『新民説』の「論進歩」という文に破壊は進歩の手段であると梁は言った。破壊とは二種類がある。其の一、「人為的な破壊は有意識の破壊であり、破壊の後に建設する」。其の二、「自然的な破壊は無意識の破壊であり、破壊のみで建設無し」。中国の場合に、自然的な破壊が行なわれたら、列強に侵され、国の独立自主が守れなくなる。それ故、自らの手で中

国に破壊事業を実行し、自強政策を施せば、国を救う見込みがまだあると梁は考えていた。また、破壊する時、少数の利益を犠牲にし流血しても、これは止むを得ない事であるとしていたのである。

以上の話を要約すれば、『合群之獨立』であれば、獨立しても分離にならない。『制裁之自由』を知れば、自由になっても亂にならない。『虚心之自信』を知れば、傲慢にならない。『愛他之利己』を知れば、利己でも偏私にならない。『成立之破壊』を知れば、破壊しても危険に陥らない。之は身を治める道であると同時に、國を救う道である」(注63)。梁は此处に「私徳」と「公德」の価値を論じ、両方を融合しようと試みていた。梁は中国の『論語』や『孟子』等の諸經典に教えられた道德がおよそ九割以上に「私徳」であり、「公德」が殆ど無い現状であると認識していた。それ故、中国人はただ自分の身を善くするのみ、その属する団体・国家に無関心である。「済人利物非吾事、自有周公孔聖人」(注64)という諺は、能く中国人の「獨善其身」という性格を描き出す。中国の病因の一つは「公德」の欠如にあると梁は判断し、「公德とは諸徳の源である」と梁は言った。此处の「源」というのは規範や基準として理解しても良い。それ故、梁は決して「私徳」の価値を否定する訳ではなく、却って「私徳」がなければ「公德」が成り立たず、「私徳」は「公德」と良く協調していかなければならないと考えた。つまり、梁は中国人の「私徳」を「公德」に推し広げなければならぬと考えたのであった。

4. 結 論

以上、梁啓超の思想を福沢諭吉の思想的影響をも鑑み、論述してきたが、梁と福沢の相違点を次に検討していきたい。

先ず、両者は儒教に対する態度が異なる。福沢は儒教に対して最も厳しく批判していた。福沢にとって、儒教は封建専制主義を支える理論根拠である。儒教は社会の人間関係を固定化して、「五倫五常」の徳目で人間を束縛する。また、儒教が無批判的に古代聖人を崇拜することは、恰も人間を精神的な奴隷にさせるのと同じである。人間の活発な思惟活動が儒教に抑圧されるから、社会が常に停滞して進歩しない訳である。それ故、日本を文明開化に進めるには、必ず「腐儒の腐説」を一掃しなければならないと福沢は考えた。儒教が最も尊敬している孔孟の説について福沢はこれが今日の世に合わない説であると指摘していた。

梁啓超は近代社会に適合しない固陋の学説を棄てる点において、福沢と異論がない。しかし、梁は福沢のように全面的に儒教の存在価値を否定するつもりはなかった。梁は中国が数千年もアジアに存立し得たのはその優れた文化的特質があったからだとする。その文化的特質を守り発展させ、所謂「旧から新を見いだす」―「温故知新」―ことが中国の独立に必要なのである。その特質は中国の伝統文化に潜んでいる。例えば、今日の西洋の民権の宗旨は、実際に中国の古代聖賢の訓言にもある。ただ秦漢以来の君主や学者は聖賢の本旨を良く理解せず、本末倒置になっている(注65)。それ故、先ず秦漢以来の弊害を一掃し、古代聖賢の言行を見直し、中国の優良な特質を見いだすことである。つまり、梁はあくまでも聖人の言説を再評価する立場に立ち、破壊すべきは聖人でなくむしろ後世学者の歪んだ学説であると考えていた。

つぎに、福沢諭吉は1877年を境として、文明の本質について前後全く違う方向で考えていた。

梁啓超はこれについて如何に考えていたのか。1877年以前の福沢は「内」から「外」へ方向として、「人民独立の精神→人民精神の活発化→社会の多事化→文明利器の導入→文明社会の実現」(注66)という図式で啓蒙活動を行なった。但し、1878年以後の福沢は全く逆の方向で考えるようになった。福沢は『民情一新』に、人心の活発化を引き起こす原動力として人民独立の気風よりも、交通機関などの文明の利器の発達に重点を置いていた。さらに、福沢は1883年の『兵論』に、清国が兵器を買えば強国になる見込みがあると論じた。しかし、福沢の文明観の変化が必ずしも矛盾するものではない。それは単なる「内側」又は「外側」から「人民の気風」を変化させるという違いに過ぎない。要は「人民の気風」が旧慣を脱して活発に活動し、社会を活性化にする事であった(注67)。この前後で変化した福沢の文明観に対し、梁は如何に考えていたのか。梁が『新民説』に述べたのは明らかに「内側」から「人民の気風」を変化させる図式である。梁にとって、福沢の『兵論』に論じたことが中国に妥当しないことは「日清戦争」により証明された。言い換えれば、文明の利器のみを導入する中国の「洋務運動」が、結局失敗に終わることは明白であった。それ故、梁はやはり人民独立の精神という、いわば「内側」から啓蒙活動を実行するという方法を取らざるを得なかった。

当時、中国と日本は欧米諸国の勢力拡張に抵抗し、弱肉強食の国際社会に独立自主国として生き残るため、それぞれ近代化政策に取り組んだが、中国は軍事産業を中心として、日本は政治改革を中心として、近代化に進んでいった。両国の近代化の方針が異なり、その優勝劣敗が日清戦争に反映されたのである。このような時代の背後で、中日両国の知識人の間に活発な思想交流活動が行なわれた。その交流活動の最前線に立ったのが梁啓超であった。彼は日本の知識人と広く交際し、又、日本の維新思想を批判的に受け入れた。その中で、彼は福沢諭吉の文明思想の影響を強く受けていた。福沢の思想の中核である人民独立の精神という提唱を中国人の身に付ける事こそ、中国を救う唯一の方法であると梁は考えていた。梁は当時、中国から離れ、外側から中国社会を覗いていたので、中国の問題の根源がより鮮明に見られたのであった。梁啓超は福沢の物理学的な思维方法を学び、中国の問題を分析しながら、彼の『新民説』を展開していった。梁は『新民説』の諸項目で福沢の独立自尊を最も高く評価した(注68)。また、梁は徳目の中で中国人に最も欠けているのが「公德」と指摘した。

さらに、福沢諭吉の影響は日本国内に止まらず、中国と朝鮮にも及んでいた。1900年から民国初年(1911年)にかけて福沢の著作の漢訳が続々と中国で出版されていた(注69)。この際、福沢の思想を中国に紹介するうえで、梁啓超は最も重要な役割を演じていたのである。梁の論文を掲載する『新民叢報』は、在日華僑や留学生だけではなく、中国内地でも好評が得られた(注70)。加えて梁の文章は後の「新中國」を建設する重要な人々に読まれていた。胡適(注71)は彼の自伝『四十自述』の中に、「あの時代(1905年頃)に梁啓超の文章を読んで、興奮と感動とを受けぬ者は一人もなかった」と回顧した(注72)。小野和子は梁の『清代學術概論』の注釈に、「毛澤東も『新民叢報』を読んでその文章を暗誦した」(注73)と記している。この点からも、梁の中国における影響力の大きさが推し量れるだろう。つまり、福沢の思想は梁啓超を通じ間接に近代の中国に影響を与えたと考えられるのである。1911年の「辛亥革命」後、梁は祖国に帰り、「新中國」の建設に努めていた。梁は民国政府の熊希齡(注74)や袁世凱内閣等の

閣僚になり、国民の教育に最も力を入れていた。その後、梁は欧州外遊のあと、政務を辞め、「清華學校」で教え、学術研究に励み、余生を送ることになる。梁は中国の近代化運動に大きな貢献を遂げ、また、近代中日の思想文化交流史に於て先導的な地位を占めていたのである。

今回の論文においては、梁の第三期の思想、つまり、帰国以後の「新中國」での思想的活動には触れることは出来なかった。この点については今後の研究課題とする。また、梁も福沢も「物質」と「精神」の文明の調和を強く主張していたが、20世紀に入ってから、科学の進歩により「物質の文明」の発展は「精神の文明」が追い付かぬほど急速に進んでいった。この不均衡な発展が中国や日本の近代化の過程に如何なる影響を与えたのかについてもさらに考察していきたい。

注 釈

1. 李鴻章(1823-1901)は道光の進士である。洋務派の官僚として清末の政局を支配した。日清戦争が敗北する際、全権大臣として屈辱的な講和条約を締結したため、「李鴻章の肉を喰わん」といわれるほどに、民衆の憤激をかった。しかし、「變法」運動の高まりの中で、啓蒙宣伝のために「強學會」が設立されると、彼もその資金援助を申し出たが、拒絶された。
2. 光緒皇帝は中国の清末の皇帝で、在位期間が1875年から1909年までである。
3. 康有為と梁啓超らの「戊戌變法」は1898年9月の「政變」まで、僅か103日しか続かず、幕を開ける事になった。故に、「戊戌變法」は「百日維新」と称される。
4. 梁啓超の年譜は彭 1976を参照。
5. 「科挙」は中国で行なわれた官吏登用試験である。隋・唐の時に制定され、秀才・進士・明經などの六科に分け、經典・詩文などを試験した。宋以後、科目は進士だけとなり、郷試・會試・殿試を新設した。清末、1905年に廃止された。(『広辞苑』1983)
6. 「會試」は科舉で郷試に及第した學人が京師で受ける第二次試験である。これに及第して殿試に合格すれば進士となった。(同上)
7. 『瀛環志略』は全十巻、アメリカ人雅卑理に基づき、更に西洋人を訪問して質問し、五年の歳月と数十回の原稿の書きかえを経て完成されたものである。専ら地理を叙述している。
8. 「公車」とは科舉の受験生である。1895年5月2日、康有為は当時北京の科舉に集まっていた千余名に及ぶ各省からの受験生の署名を集め、政治改革を求める上奏文を光緒皇帝に提出したか、最終的にこの上奏文が皇帝の手に届けなかった。しかし、このように多くの人々の署名による上書は当時の社会に相当な影響力を持っていた。これは「公車上書」と言われる。
9. 黄遵憲(1848-1905)、字は公度、中國廣東嘉應州の人。清朝の外交官として日本、イギリス、アメリカ等を歴訪した。「戊戌變法」当時の湖南按察使であり、「變法」運動にも参与して、湖南における新政の推進に当った。梁啓超を「事務學堂」の中文総教習に招いたのは彼であり、『事務報』創刊にさいしては、一千元の資金を投入して、改革宣伝への熱意を示している。『日本國志』や『日本雜事詩』などを著した。
10. 『時務報』(The Chinese Progress)が1896年に創刊され、汪康年はその業務を、梁啓超はその編集をそれぞれ担当した。『時務報』は1898年8月8日の第69号を『昌言報』と改題するまで続いた。その内容は主に官庁の公告・論説・外国新聞からの翻訳記事などによって構成され、「變法」鼓吹の上で大きな役割を演じた。発行部数一万といわれる。
11. 「論報館有益於國事」は1896年の著作で、『飲氷室合集』の文集第二冊100頁に載せている。
12. 「新聞を多く讀めば讀むほど、人はより智になる。新聞社が多くあればあるほど、國は強くなる」と、梁は新聞の重要性を説いた。「閱報越多者、其人越智、報館越多者、其國越強」(原文)(梁 1936, 文集第2冊 101頁)。

13. 彭 1976, 195頁。
14. 梁 1936, 「變法通議」文集第1冊, 1-93頁。
15. 「法者天下之公器也、變者天下之公理也」(原文)(同上, 8頁)。
16. 「釋之曰、不能創法、非聖人也、不能從時、非聖人也」(原文)(同上, 4頁)。
17. 「變亦變、不變亦變、變面變者、變之權操諸己、可以保國、可以保種、可以保教」(原文)(同上, 8頁)。
18. 「今夫日本幕府專政、諸藩力征、受俄德美大創、國幾不國、自明治維新、改弦更張、不三十年、而奪我琉球、割我臺灣也」(原文)(同上, 3頁)。
19. 「吾今為一言以蔽之曰、變法之本、在育人才、人才之興、在開學校、學校之立、在變科舉、而一切要其大成、在變官制」(同上, 10頁)。
20. 「吾聞之、春秋三世之義、據亂世以力勝、升平世智力互相勝、大平世以智勝、……世界之運、由亂而進於平、勝敗之原、由力而趨於智、故言自強於今日、以開民智以第一義」(同上, 14頁)。
21. 「日本には字が讀める人間が百人の内に80餘人も居るのに対し、文明國と称される中國では僅か20人にも及ばない」(作者訳)。「日本百人中識字者、亦八十餘人、中國以文明號於五洲、而百人中識字者、不及二十人」(原文)(梁 1936, 「沈氏音書序」文集第2冊 1頁)。
22. 同上。
23. 「天下を治める根本は人心を正し、人材を多く育成する事にある。二者の根本がまた人の教養にある。教養の本は必ず母の教えにある。故に、女子教育は實に天下の存亡強弱の根源である」(作者訳)。「故治天下之大本二、日正人心、廣人才、而二者之本、必自蒙養始、蒙養之本、必自母教始、母教之本、必自婦學始、故婦學實天下存亡強弱之大原也」(原文)(梁 前掲書(14), 40-41頁)。
24. 「我々は西洋を牛にして日本を農家にする。我々は何もせず、彼らの收穫が得られる。つまり、千萬の金が掛からず、役に立つ本を手に入れる事が出来る」(作者訳)という比喻を使い、日本語の書物を翻訳する良さを説明した。「是吾以泰西為牛、日本為農夫、而吾坐而食之、費不千萬金、而要書畢集矣」(原文)(梁 1936, 「讀日本書目志書後」文集第2冊 51頁)。
25. 「學校を開き、人材を養成する事を以て、中國を強くする。そうなら、先ず科舉を變革しなければならない」(作者訳)。「如欲興學校、養人才、以強中國、惟變科舉為第一義」(原文)(梁 前掲書(14), 27頁)。
26. 「權者生於智者也、有一分之智、即有一分之權、有六七分之智、即有六七分之權」。梁啓超「上陳寶箴書論湖南應辦之事」『戊戌政變記』第8卷, 2頁。
27. 「日本之步武泰西至速也、故自維新至今三十年、面治藝已成、……吾今取之至近之日本、察其變法之条理先後、則吾之治効、可三年而成。……日本變法、二十年而大成、吾民與地十倍之、可不及十年而成之矣」(原文)(梁 前掲書(14), 27頁)。
28. 「戊戌政變」が勃発し、梁啓超は北京の日本公使館に逃げ込んだ。当時、恰も伊藤博文は中國を訪問していたところで、梁啓超に対して、「それ(變法)は好い事をした。梁を救けてやれ。そして日本に逃してやれ。日本へ着けば、俺が世話してやる」(彭 1976, 240頁)と言い、梁啓超を日本へ逃したのである。梁は日本公使の庇護の下で、日本の軍艦「大島」に乗り組み、日本に逃亡した。それから、13年間の海外の亡命生活が始まった。1898年10月19日に梁啓超は東京に到着した。日本政府の配慮で、都内の牛込区馬場下町に住むことになった。
29. 梁啓超は来日してから、広く日本の知識人と交際していた。その中に、犬養毅や高田草苗や柏原文太郎などがいた。
30. 「戊戌九月(西曆1898年10月)、日本にやってきた。10月に横浜の商人たる諸同志と『清議報』の創立を謀った。それ以来、東京に一年ぐらい住んでいた。少し日本語が讀めるようになった。それ故、思想が一變した……」(作者訳)。「戊戌九月至日本、十月與橫濱商界諸同志謀設清議報、自此居日本東京者一年、稍能讀東文、思想為之一變、己亥七月、復與濱人共設高等大同學校於東京、内地留学生預備科之用、即今之清華學校是也……」(原文)(梁 1916c, 「三十自述」 166頁)。
31. 「又、日本に来てから、廣く日本の書物を集めてそれを讀み、様々な新しい事物を発見した。それ故、私は思想と言論に於て前と比べれば、まるで別人のようになった。毎日、日本の新聞を讀み日本の政界

- と學術の事について、より良く理解できるようになった」(作者訳)。「又東居以来、廣搜日本書面讀之、若行山陰道上、應接不暇、腦質為之改易、思想言論與前者判若兩人、毎日閱日本報紙、於日本政略學界之事、相習相志、幾於如己國然、蓋我之於日本真有所謂密切之關係、有許多之習慣耶、於腦中欲忘而不能忘者在也」(原文)。梁啓超「夏威夷遊記」『新大陸遊記』1903年。
32. 梁 1936, 文集第2冊 61-62頁。
33. 「人有之則生、無之則死、國有之則生、無之則亡、……斯物也、名之曰元氣。」(同上)。
34. 「文明者、有形質焉、有精神焉、求形質之文明易、求精神之文明難精神既具、則形質自生、精神不存、則形質無附、……所謂精神者何、則國民之元氣」(原文)(同上)。
35. 「自衣服飲食器械宮室、乃至政治法律、皆耳目所得聞見者也、故皆謂之形質、而形質之中、亦有虛實之異焉、如政治法律、雖耳可聞、目可見、然以手不可握之、以錢不可購之、故其得之亦稍難、故衣食器械者、可謂形質之形質、而政治法律者、可謂形質之精神也・・曰國於天地、必有與立、國所與立者何、曰民而已、民所以立者何、曰氣而已」(原文)(同上)。
36. 「その物たるやこれを形容すること甚だ難しい。これを養えば成長して地球万物を包羅し、これを压抑すれば萎縮して遂に其形影をも見る可らず。……これを一國人民の氣風と云ふと雖も、時に就て云ふときはこれを時勢と名け、人に就ては人心と名け、國に就ては國俗又は國論と名く。所謂文明の精神とは即ち此物なり。……即ち文明の外形のみを取る可らず、必ず先づ文明の精神を備えて其外形に適す可きものなかる可らずとの意見を述べたるものなり。・前論に文明の外形はこれを取るに易く其精神はこれを求めるに難しとの次第を述べたり・・・」(福沢 1931, 29-30頁)。
37. 福沢の推量によれば、真偽版本を合し、初編がおおよそ22万冊売られたという。当時、日本の人口を3500万とすれば、日本人160名の内に一名は必ずこれを読んでいたことになる。これによって、『学問のすゝめ』が如何に広く読まれていたかが分かる(福沢 1942, 9頁)。
38. 同上, 12頁。
39. これは中国社会科学院哲学研究所西方哲学史研究室編『外国哲学史研究集刊・東方哲学研究』の中にある「福沢論吉的資本主義現代化思想」という論文によるものである。しかし、この論文の作者はこれについて文章に具体的な資料根拠を書いていない。が、当時、中国と日本の間に交通が発達し、福沢論吉のことが中国に行く日本人により伝えられたことが十分可能である。
40. 「犬養毅は私に次のように話った。日本は明治維新以来、文明を普及する方法が三つある。曰く、學校、新聞、演説である。大体、字が多く讀める國民に対し、新聞を利用すべきである。字がそれほど讀めない國民に対しては、演説を利用すべきである。日本の演説は福澤論吉により創られたのである。(福澤論吉は日本の洋學の先頭で、學識の優れた人である。)福澤は彼の慶應義塾で演説を始め、当時、彼が怪物として見られたと云う。それから、社會の氣風が変わった。今日、僅か数人の集會にも、必ず演説をする人がいる。これは實に文明の進歩に大きな力になる。我が中國は近年、學校や新聞の利益を知る人が多い。しかし、演説の利益についてあまり知られていない。去年の湖南の南學會と京師の保國會はいずれも西洋の演説會であった。この演説會の力により、湖南に維新の氣風が進んだが、これを長く續かず、間もなく廢止された。今日の中國人は演説に力を入れるべきである」(作者訳)。
- 「犬養木語堂余曰、日本維新以来、文明普及之法有三、一曰學校、二曰報紙、三曰演説、大抵國民識字多者、当利用報紙、國民識字少者、当利用演説、日本演説之風、創於福澤論吉氏、(按福澤論吉氏日本西學第一先鋒也、為一時之泰斗)在其所設之慶應義塾開之、當時目為怪物云此後有嚶鳴社者、專以演説為事、風氣既開今日凡有集會、無不演説者矣、雖至数人相集宴飲、亦必有起演者、其實助文明進化一大力也、我中國近年以来、於學校報紙之利益、多有知之者、於演説之利益、則知者極鮮、去年湖南之南學會、京師之保國會、皆西人演説會之意也、湖南風氣驟進、實賴此力、惜行之未久而遂廢也、今日有志之士、仍当着力於是」(原文)(梁 1916b, 「文明普及之法」7頁)。
41. 「南學會」は、梁啓超らか、単に學術機關たるに止まらず、議会の規模をも併せもつものとして構想し、湖南革新の拠点としようとしたものである。
42. 『新民叢報』は、1902年、日本の横浜で創刊された改良派の雑誌。半月刊。梁啓超はこの主筆として毎号健筆をふるい、ヨーロッパの近代思想の紹介と革新思想の宣伝に務めた。1907年停刊。

劉：梁啓超の維新思想に見える福沢諭吉の「文明論」

43. 和田 1962, 4頁。原文は梁啓超の「論學術勢力左右世界」で、『新民叢報』第1号。
 44. また、『新民叢報』のフロント・ページに常に写真が載っていた。創刊号から第六号まで重要な欧米の哲学者や政治家の画像のみ登載されていたが、第七号から初めて日本人の福沢諭吉と西郷隆盛の画像が「日本維新二偉人」として登載された。梁は福沢を如何に重要な人物として扱っていたかということが分かる。
 45. 「福沢諭吉、当明治維新以前、無所師授、自學英文、嘗手抄華英字典一過、又以獨力創一學校、名曰慶應義塾、創一報館、名曰時事新報、至今為日本私立學校・報館之巨擘焉、譯書數十種、專以輸入泰西文明思想為主義、日本人之有西學、自福澤始也、其維新改革事業、亦顧問於福澤者、十而六七也」（原文）（同注43）。
 46. 梁 1936, 「論教育当定宗旨」文集第4冊 61頁。
 47. 福沢 1978。
 48. 福沢 1931, 9頁。
 49. 松本 1981, 45頁。原文は『福澤諭吉全集』第十卷, 105頁。
 50. 「文明の物たるや至大至重、人間万事皆この文明を目的とせざるものなし」（福沢 1931, 51頁）。
 51. 福沢 1931, 261-262頁。
 52. 福沢 1931, 259頁。
 53. 本山 1970, 53頁。
 54. 「慶應義塾講師、演釋福澤先生獨立自尊之義、十四条」と題する記事は29条の「終身要領」の要約ではなく、原文は1900年5月31日付きの『時事新報』に掲載された「獨立自尊の意義」と題する記事の漢訳であることが明らかになった（和田 1962, 2-3頁）。
 55. 梁啓超は福沢諭吉の『文明論之概略』を数カ所直訳して自らの著作に入れた。次に、その一つの例を紹介する。まず、梁啓超の「文野三界之別」：「泰西學者、分世界人類為三級、一曰蠻野之人、二曰半開之人、三曰文明之人、真在春秋之義、則謂之據亂世升平世太平世、皆有階級順序而升、此進化之公理、而世界人民所公認也、其軌度與事實、有確然不可倣傚、今略之如下。第一、居無定處、食無常品、便利而成群、利盡則散去、雖能田漁以充衣食、而不知器械之用、雖有文字、而不知學問、常畏天災、期天幸、坐待偶然之禍福、依賴他人之恩威、而不能操其主權於己身、如是者、謂之蠻野之人。第二、農業大開、衣食既具、建邦設都、自外形觀之、雖已成為一國、然觀其內、實則不完備者甚多、文學雖盛、而務實學者少、其於交際也、疑之心雖甚深、及談事物之理、則不能發疑以求真是、模擬之細雖工巧、而創造之能力甚乏、知修旧而不知改旧、交際雖有規則、而其所謂規則者、皆由習慣而成、如是者謂之半開之人。第三、範圍天地間種種事物於規則之內、而以己身入其中以鼓之、其風氣時變易、而不惑溺於旧俗所習慣、能自治其身、而不依賴他人之恩威、自修德行、自拓智慧、而不以古為限、不以今自画、不安小就、而常謀未來之大成、有進而無退、有升而無降、學問之道、不尚虛談、而以創新法為尚工商之業、日求擴充、使一切人皆進幸福、如是者謂之文明之人。論世界文野階級之分、大略可以此為定點、我國民試一反觀、吾中國於此三者之中居何等乎、可以然以興矣」（原文）（梁 1916b, 15-16頁）。
- 次に、福沢諭吉の『文明論之概略』：「・・・即是れ人類の當に經過す可き階級なり。或は之を文明の齡と云ふも可なり。第一 居に常處なく食に常品なし。便利を遂ふて群を成せども、便利を尽くれば忽ち散じて痕を見ず。或は處を定めて農漁を勤め、衣食足らざるに非ずと雖も器械の工夫を知らず、文字なきには非ざれども文學なるものなし。天然の力を恐れ、人為の恩威に依賴し、偶然の禍福を待つのみにて、身みづから工夫を運らす者なし。これを野蠻と名づく。文明を去ること遠しと云ふ可し。第二、農業の道大に開けて衣食具はらざるに非ず。家を建て都を設け、其の外形は現に一國なれども、其内実を探れば不足するもの甚だ多し。文學盛なれども実學を勤める者少なく、人間交際においては詐疑嫉妬の心深しと雖も、事物の理を談ずるときには疑を發して不審を質すの勇なし。模擬の細工は巧なれども新に物を造るの工夫に乏しく、旧をおさめるを知って旧を改めるを知らず。人間の交際に規則なきに非ざれども、習慣に圧倒せられて規則の体を成さず。これを半開と名づく。未だ文明に達せざなり。第三、天地間の事物を規則の内に籠絡すれども、其内に在て自ら活動を逞ふし、人の氣風快発にして旧慣に惑溺せず、身みづから其身を支配して他の恩威に依賴せず、自ら徳を修め自ら智を研ぎ、古を慕はず今を

是れりとせず、小安に安んぜずして未来の大成を謀り、進て退かず達して止まらず、学問の道は虚ならずして発明の基を開き、工商の業は日に盛にして幸福の源を深くし、人智は既に今日に用ひて其幾分を余し、以て後日の謀を為すものの如し。これを今の文明と云ふ。野蛮半開の有様を去ること遠しと云ふ可し」(福沢 前掲書(50), 24-25頁)。

56. これについて、福沢の話が参考になると思う。福沢は『文明論之概略』の緒言に洋書からの引用について、「唯其(書中西洋の諸書、筆者注)大意を撮て之を訳するか、又は諸書を参考して趣意の在る所を探り、其意に拠て著者の論を述べたるものは、一々出典を記す可らず。之をたとへば食物を喰て之を消化したるが如し。其物は外物なれども、一度び我身内の物たらざるを得ず。故に書中稀に良説あらば、其良説は余が良説に非ず、食物の良なる故と知る可し」(同上, 12-13頁)と述べているが、梁もたぶんこれを読み、同感を抱いたのではなかろうか。
57. 「不治遠因而欲治近因、必不可得治」(原文)(梁 1916b, 「近因遠因之説」 20頁)。
58. 『新民説』の内容は「公德」を始めとして、「國家思想」・「進取冒險」(＝冒險精神)・「權利思想」・「自由」・「自治」・「進歩」・「自尊」・「合群」(＝團結)・「生利分利」(＝生産と消費)・「毅力」(＝根氣)・「義務思想」・「尚武」・「私徳」及び「民氣」である。
59. 梁 1916a, 第18節「論私徳」 201頁。
60. 「私徳と公德は相反対ではなく、むしろ相屬の名詞である」(作者訳)。「私徳與公德、非對待之名詞、而相屬之名詞也」(原文)(同上)。
61. 福沢 1942, 29頁。
62. 「民族帝國主義」は梁啓超が『新民説』に使っていた用語である。梁は「民族帝國主義」を次のように解釈した。「民族主義(Nationalism)とは、各地の同じ種族、言語、宗教及び風俗の人々は集まり、互いに同胞として扱い、獨立自治である。又、組織完備の政府を作り、公益を謀り、外敵を打ち払う。この主義は19世紀の末になってから、民族帝國主義に変わった。民族帝國主義(National Imperialism)というのは、その國の國民の實力は國內において頂点までに達すれば、必ずその國力を以てその國の權力を海外に擴張する。手段は兵力や商業や工業や教會などである」(作者訳)。「民族主義(Nationalism)者何、各地同種族同言語同宗教同習俗之人、相視如同胞、務獨立自治、組織完備之政府、以謀公益而禦他族是也、此主義發達既極、至十九世紀之末、(近二三十年)乃更進而為民族帝國主義、(National Imperialism)民族帝國主義者何其國民之實力、充於內而不得不溢於外、於是及及焉求擴張權力於他地、以為我尾、其下手也、或以兵力、或以商務、或以工業、或以教會、而一用政策以指揮調護之是也・・・」(原文)(梁 1916a, 5-6頁)。
63. 「亦曰知有合群之獨立、則獨立而不輒輟、知有制裁之自由、則自由而不亂暴、知有虛心之自信、則自信而驕、知有愛他之利己、則利己而不偏私、知有成立之破壞、期破壞而不危險、所以治身之道在是所以救國是道亦在是」(原文)(梁 1936, 文集第2冊 51頁)。
64. 「他人を助けるのは私の仕事でなく、それを周公孔子のような聖人に任せる」(作者訳)(梁 1916a, 第12節「論自尊」 126頁)。
65. 「余竊觀中國古聖賢創業垂訓、具合於泰西民權之宗旨、・・・・・惜乎後世昧於聖哲本旨、不能擴充闡明以成太平、至於大道晦冥、冠履倒置、今欲舉秦漢以來積弊、推陷而廓清之」(梁 1916b, 「草茅危言」 23頁)。
66. 本山 1970, 54頁。
67. 同上, 56頁。
68. 「日本の大教育家である福澤諭吉は學者を訓導する際、獨立自尊を徳育の最大綱領として取り上げた」(作者訳)(梁1916a, 第12節「論自尊」 114頁)。
69. 例: 張紹相譯『男女交際論』文明書局, 1903。朱宗萊譯『國民道德談』中國圖書公司, 1915。蔣正陸譯『人格修養法・獨立自尊』上海印書館, 1916。次、現代の中國における福澤諭吉の翻譯書: 『勸学篇』中國: 商務印書館, 1959。『文明論概略』中國: 商務印書館, 1962。『福澤諭吉自伝』中國: 商務印書館, 1980。
70. 1906年、上海の新民叢報支店では、およそ一万四千部も売り出したと言われた(丁文江編『梁任公先

- 生年譜長編初稿』, 208頁)。また、中国内地の翻刻本が十数種もある(梁 1974, 141-142頁)。
71. 胡適(1891-1962)、字は適之、上海の中国公学などに学び、1910年留学生試験に合格してアメリカに留学、コーネル大学、コロンビア大学に進んだ。この間、雑誌『新青年』に寄稿した「文學改良芻議」は、「白話文學」を提唱して、「五・四時期」における文学革命の一契機を成したものである。1917年、帰国、北京大学教授。1938年駐米大使、1946年北京大學学長などを歴任、中華人民共和国成立後はアメリカに亡命生活を送り、後に台湾に帰った。胡適の『四十自述』には、青年時代における梁啓超の影響について次のように述べている。「梁さんの文章は、はっきりとわかりよい中に、濃厚な熱情を帯び、其の結果讀者は、彼の後からついて行かずにはおれなくなり、彼の後について考えずにはおれなくなる。・・・私自身梁さんには無窮の恩恵を受けた。今から想い起こして見ると、最もはっきりしたものが二つある。第一は彼の『新民説』であり、第二は彼の『中國學術思想變遷之大勢』である。・・・『新民説』の諸篇は、私に一つの新しい世界を開いて呉れ、我が國の外になお非常に高等な民族と、非常に高等な文化がある事を、私に十分に信じさせたが、『中國學術思想變遷之大勢』も、私に一つの新しい世界を開いて呉れ、『四書五經』以外にも、我が國には學術思想がある事を私に知らせた」(吉川幸次郎訳『吉川幸次郎全集』十六)。(梁 1974, xii-xiii頁)。
72. 胡適著、吉川幸次郎訳『胡適自傳』養徳社、91頁。
73. 梁 1974, 277頁。
74. 熊希齡(1870-1937)は、中国の湖南鳳凰の人、光緒の進士であった。「翰林院庶吉士」となったが、湖南に帰り湖南の新政を推進、特に「事務學堂」の経営に当った。「戊戌變法」失敗後は、日本、ヨーロッパを遊歴、辛亥革命後、唐紹儀内閣の財政総長となった。

参考文献

- 呉 八駿 1984,『梁啓超與戊戌變法』臺北：文哲史出版社。
- 中国革命史研究会編 1958,『新民叢報目録』中国。
- 中国社会科学院哲学研究所西方哲学史研究室編 1984,『外国哲学史研究集刊・東方哲学研究六』上海：上海人民出版社。
- 福沢 諭吉 1931,『文明論之概略』岩波文庫。
- 福沢 諭吉 1942,『学問のすゝめ』岩波文庫。
- 福澤 諭吉 1959,『福澤諭吉全集』岩波書店。
- 福沢 諭吉 1978,『新訂福翁自伝』岩波文庫。
- 馮 紫珊 1902-06,『新民叢報』横濱：新民叢報社。
- 彭 澤周 1976,『中國の近代化と明治維新』京都：同朋舎。
- 松本 三之介 1981,『明治精神の構造』新NHK市民大学叢書8, 東京：日本放送出版協会。
- 本山 幸彦 1970,「明治前半期におけるアジア觀の諸相」『人文学報』第30号, 京都大学人文科学研究所。
- 新村 出編 1983,『広辞苑』第3版 岩波書店。
- 李 国俊編 1986,『梁啓超著述係年』上海：復旦大学出版社。
- 梁 啓超 1916a,『親民説』飲氷室叢書第1種, 上海：商務印書館。
- 梁 啓超 1916b,『飲氷室自由書』飲氷室叢書第11種, 上海：商務印書館。
- 梁 啓超 1916c,『飲氷室自由書付録』飲氷室叢書第11種, 上海：商務印書館。
- 梁 啓超 1916d,『新大陸遊記』飲氷室叢書第12種, 上海：商務印書館。
- 梁 啓超 1936,『飲氷室合集』上海：中華書局。(文集20冊・專集20冊)
- 梁 啓超 1974, 小野和子訳『清代學術概論』平凡社。
- 和田 博徳 1962,「中國における福澤諭吉の影響」『福澤諭吉全集』第19巻付録, 岩波書店。
- Chang, Hao 1971, *Liang Ch'i-ch'ao and Intellectual Transition in China 1890-1907*, Harvard University Press.
- Schwarcz, Vera 1986, *The Chinese Enlightenment: Intellectuals and the Legacy of the May Fourth Movement of 1919*, University of California Press.